まだ見ぬ人たちの田園回帰を夢見て

人形げきや 立田 田卓也

業にしてきた経験を基に、木育や人形劇 みらい会議主催)と、昨春から『オタコ 跡地で、『木育がっこう』イベント(砥部 し、閉じたうちの一つ「高市小学校」の 私達子育て世代が広田旧3小学校を統合 て遊んでいます。 で、地域外の親子さんとの交流拠点とし 家族でJターン移住してきた者ですが、 ノモリ』を不定期開館。 「広田村」が「村」で無くなった頃 人形劇興行を生



音楽室を人形劇場に。数人のお客さんを前に、 かり参加してしまう幼子。お話しは広田の民話

形である「ご長寿化」が支えてくれ、 こと。留学制度という教育分野での交流 は数名しかおらず、過疎と少子高齢は が設置された25年以上も前から地元児童 よその子を見守る環境も、高齢化の進化 縁によらない4世代コミュニティがこの 人口は小学校統合後も継続されており、 「化」ではなく、既に「完成」していた ここ高市地区は、「山村留学センター」

があったからこそでしょう。 う』を開催できたのも、このような地力 里山にはずっとありました。 閉校したその年の秋から『木育がっこ

オリジナル展開の『木育がっこう』

砥部町で長らく子育て支援を担ってい

と使ったイベントを展開。

砥部はもちろ

もちゃへのニーズをみています。

実施する私たちも木のノウハウが得ら

ん、松山近郊の親子連れを中心に木のお

び方の違う木のおもちゃを配置し、木を

で行っていこうと、教室ごとに年齢や遊

用いたワークショップなど、校舎を丸ご



や、県内外の移住交流事例を学ばせても づくり団体「元気・ひろた」を考える会

小学校統合を前に結成した新たな地域

らう中で、当地の可能性をたくさん見つ

私の地域づくりの現場

図工室はDIY 好きの憧れ、一から自分の手で作る。手の早い子ゆっくり時間をかける子、紙やすり女子、いろいろ

レンジを求められています。

リピーターも増え、

毎回新たなチャ

勧めている ぽっかぽか 団体との連 の働きかけ て支援団体 る N P O 人砥部子育 「木育」を 全国に



上浮穴高学生さんが 「木育がっこう」 ワークショップ。 これも教育

携を私たち は模索し

大人にカホンの作り方を教え。

もったいないですね~

Ш

来校者のほぼ100%この発言を引き

はなりませんでした。ならば自分達独自

町行政を巻き込んでの連携と

ましたが、

Ш

16

舎はその人を温かく包み、問い直してく

にして生きていきたいのか。

れは一人ひとりが人生の中で〝何を大切

ここを『もったいない』と思うのか、

てくれる、そんなヒトです。

なぜヒトは

田舎の田舎で育ち、暮らす選択

だ計り知れな ちゃに留まら るようです。 い可能性があ そして逆に、 木のおも 木にはま

なコミュニ 私から、豊か ティである田 な自然や小さ

ない方々に、 舎という「国 いないですよ いやーもった わったことの 富」をまだ味



に砥部ファミサポを招いて。人の為 なら夜なべで栗剥き。ここに来てもらうことで季節を 肌と匂いと舌とで感じる体験を



本職の大工さんが作った、ホゾを用いた家のミ 「木育がっこう」はお仕事体験の面も

のの

持っている教育への信頼に思います。

先生親子が多く、

そこは学び舎自体の

スタッフや参加者に幼保小学校

保育教育現場の課題を話したり、

先生

今

「親」の姿が見えたりと、

木育の哲学

時、杉の輪切りを手こうで、「児童の中で一番つき合っている子があるり』を春からの開館以来、留学センター てくれて、 (値段) かかってるん?」と、 聞いてき

オタコ(私):年輪を数えてみたら…40年 位かな。これを伐った人が いて、山から降ろして運ん だ人がいて。材木なら製材 した人がいて。何よりこの 木を40年前に植えた人が いて。たくさんの人の「時 と「力」がかかってい お金じゃ無いんよ

点です。この

の、ここは拠 ~と言うため

たちこそが、可能性ですよと言いたい。 高市を選んで遊びに来てもらったあなた

に欲しいのは、自分自身や家族と喜んで

地域で暮らす人とともに汗を流し

ヒト・モノ・カネのうち、地域が本当

児: それを言うなら山の 「土」 が 作ったんよ

オタコ:ムムム(゜ε゜;)

これがもし「木」の事柄でなかった ここまでたっぷりつき合わなかった

5

れた事が長らくひっ しょう。 このような対話は生まれなかったで 「待つこと」。 ある方に木育を哲学せよと言わ ならば答

私からこの子への「木育」は とのできた廃校舎の図工室の昼下がり、 供から大人への成長期間は変わらないの を伸ばしてくれるでしょう。 だろう現代に生きる若人。時を止めるこ 少子化のせいか目につく青田 他者との関係性体験が総じて少ない あとは自ら自由に 一つ成し遂 刈 り、

変化は可能

芽生えることのない地域コミュニティの ただこの変化を肯定的に捉える言葉を、 大木を伐り倒され、大きな痛みでした。 「木は山から伐りだされ、材になり、 れたのが忘れられません。 林業家でもある当時の区長が話して 学校閉校は地域住民にとって、

あり、 郷」への価値転換です。 供していくこと、そこに可能性が開かれ 地域外の親子さんに木の体験・木育を提 踏み入れることもなかっただろう大勢の 町々を支える柱になる」と閉校の挨拶 田舎にエールを送り、 ています。 これらイベントを通じて、高市に足 て高市で種まきを続けます。 「私の故郷」から「あなたの それは日本中への田園回 ただただ木に信頼 この地と全ての 帰で 新